

## 日本の戦争指導におけるビルマ戦線 - インパール作戦を中心に -

荒川憲一

### はじめに - ビルマ戦線の概要と問題意識 -

1941 年末から 1945 年夏までのビルマにおける日英の戦いを概観すると、大きな戦い  
がその年の初めに起きていることがわかる。これはビルマの天候の所以で、ビルマでは  
5 月から 10 月頃まで雨期であり、大部隊の作戦行動が事実上不可能になるからである。  
1942 年初めには日本軍によるビルマ侵攻、ビルマ占領があり、1943 年初めには一方で  
アラカン作戦、英軍によるアキャブ攻勢とその敗退があり、他方ウインゲート准将  
(Brigadier General Orde Wingate) の第一次遠征隊がチンドウイン河を渡った。この  
作戦は戦略目的がなく損害も多かったが、実行したことの心理的インパクトは大きく、  
英軍の士気を高めた。1944 年初めには日本軍がそのチンドウイン河を逆方向の西に向か  
って渡った。インパール作戦である。その敗北は日本軍の不敗の自信をうち砕きビルマ  
防衛組織の崩壊を早めた。1945 年初めには連合軍がビルマに反攻してなだれ込み、イラ  
ワジ会戦が生じた。

スリム将軍 (General Sir William Slim) はこれらの戦い全てに関係していた。ウイ  
ンゲートは 1943 年登場し 1944 年に事故死する。1942 年と 1943 年の戦いでスリムは  
英印軍の劣弱さととりわけ士気の低さと日本軍の精強さととりわけ兵士の敏捷さを思い知ら  
されることになった。英印軍の阻喪した士気を蘇生させたのはウインゲートとそのチン  
デット (長距離挺進隊) であるという見解がある。その評価は別にして、とにかくスリ  
ムは英印軍を訓練し、十分な装備と給養を確保して 1944 年と 1945 年の戦いで日本軍に  
英印軍の力を見せつけた。

他方、日本側には大戦中、終始ビルマ戦線で戦った将軍は一人もいない。ただ比較的  
長くビルマに在任した将軍に牟田口廉也中将がいる。牟田口中将は開戦当初、第 18 師  
団長としてシンガポール攻略戦に参加、これを陥落させた後、ビルマ戦線に加入してき  
た。牟田口指揮する 18 師団はビルマ占領作戦でも活躍した。その後、牟田口は 1943 年  
3 月に飯田中将に代わって第 15 軍司令官となる。インパール作戦は終始、牟田口の主導  
で計画され実行された。1944 年 7 月インパール作戦は中止となり、牟田口はその後の  
ビルマ戦線の結末を見ることなく、9 月本国に戻され予備役となったが、1945 年 1 月再  
び召集され予科士官学校長となって終戦を迎えた。

第二次大戦でビルマ戦線がどうであったかについては日英公刊戦史等を通じてほぼ

事実関係は確定しているように思われる。現段階でのビルマ戦線についての研究はそれらの事実関係を踏まえた上で、日英両側の様々な疑問を解明することではないだろうか。筆者はビルマ戦線における日本の戦争指導上のある疑問を解明したい。それは、なぜインド進攻が可能でインドに日本軍が進入するだけで大戦の行方にインパクトをもたらしたと考えられる時機（1942年）にこれを実行せず、実行可能性に重大な問題があり、たとえインドに進攻しえても大戦の戦局になんら影響を与えない時機にこれを決行し、多大な犠牲をだし、ビルマの防衛体制の崩壊を早めたかということである（つまり戦機に投ずる戦争指導ができなかったことである）。

英軍の公刊戦史によれば英国は対日戦争におけるビルマの戦略的位置を次のように考えていた<sup>1</sup>。まず、インド防衛の東壁である。ビルマが保持されている限り、インド北東部の大工業地帯が空襲を免れその東境からの侵入に対して安全である。次に中国軍に対する当時唯一の連合国からの補給ルートである。連合軍の戦略上の見地から中国が対日戦を続行して敵（日本軍）の大兵力を牽制することが必要であった。

一方、日本側における今次大戦のビルマの戦略的位置は南方資源地帯を連合軍の反撃から防護する西壁であり、最後に残った地上からの援蒋ルートであった。従って、英国側の防護対象であるインドに進攻する計画は初めなかった。インド進攻の件が公式に表面化するのにはビルマ全土を占領してから後の1942年の7月から8月頃であった<sup>2</sup>。直接の契機は雨期明けの連合軍の反攻に備えてのビルマ防衛の要領について大本営が南方軍に検討を指示したことである。南方軍の一幕僚が発想し、大本営もその企図には同意するが、計画が誇大に思えたことと、太平洋戦域でガダルカナルの戦いが天王山と認識され、インド進攻作戦（21号作戦と呼ばれた）は中止でなく無期延期された。

ところが、1943年に入ってから、ウインゲートのチンデットがアラカン・ジュピー山系を越えてビルマに侵入してきた。このためそれまでこの山系を大部隊が踏破することは不可能と考えていた前第18師団長で15軍司令官となった牟田口中将は軍単位の大部隊がインドに向かって攻撃するインパール作戦を発想した。この作戦は紆余曲折を経ながらも大本営は1943年8月に実施準備の指示、1944年1月に作戦発動を認可した。作戦は牟田口中将が最初に発想した通り修正されず実行された。この作戦を肯定的に評価する者は日英見渡してもほとんどいない<sup>3</sup>。

1942年の春にビルマ進攻の勢いに乗じてインドまで英印軍を追撃しなかったのは、この作戦（ビルマ攻略作戦）にインド進攻の計画がなかったからである。他方インパール

<sup>1</sup> S. Woodbarn Kirby, *The War against Japan* (London: Her Majesty's Stationery Office, 1958), p. 1.

<sup>2</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書 ビルマ攻略作戦』（朝雲新聞社、1968年）91頁。

<sup>3</sup> 例外として元15軍司令官陸軍中将牟田口廉也「1944年「ウ」号作戦に関する国会図書館における説明資料」で紹介された戦後、牟田口を評価する手紙を書いた元英14軍参謀のパーカー中佐がいる。

作戦については多くの反対があったにもかかわらず発案者である牟田口中将の主張がそのまま実行されるに至った。

本稿は後者のインパール作戦について牟田口中将を焦点に作戦が決定されるまでの段階と、作戦が実行され中止されるまでの段階に分けて、軍事的合理性という視点から論じる。それによってインパール作戦の各段階に表出した日本の戦争指導及び作戦指導の特質を明らかにしようというものである<sup>4</sup>。

## I 第1段階 - インパール作戦決定まで -

### 1 作戦の発想まで - インド進攻構想とウインゲート・チンデットのインパクト -

1942年9月、15軍司令官飯田中将は南方軍林中佐が携えてきた東部インド進攻作戦（21号作戦）準備の南方軍命令に驚き、こんな突飛な攻撃は根本的に反対であると、この作戦をなんとか中止せねばならぬと考えた<sup>5</sup>。そこで考えついたのが、軍の作戦計画を思い切って放胆なものにし、こんな計画を実行するとなれば大変だ、一応この作戦を見合わせようといった考えを起こさせることである。飯田中将はより放胆な案の作成を幕僚に命じ、その案を隷下の師団長に提示し意見を求めた。各師団長の反応はおおかた困難であるというものだった。注目すべきは、この時の牟田口中将の反応である。南方軍の案では牟田口中将率いる第18師団はアッサム進攻の主担当師団であったが15軍の案では当初予備の後方梯隊となっていた。飯田中将からこの案について意見を求められた牟田口は「兵站道路の構築、補給体系の確立準備などの点からあまりに時間的余裕なく、実現の見込みはないと思う」と答えた<sup>6</sup>。このように作戦担当の15軍がこの作戦実行に消極的であり、戦局の焦点が太平洋正面に移ったこともあり、21号作戦は中止ではなく無期延期された<sup>7</sup>。

1943年の初め、全く不可能と思われた大部隊のアラカン山系と、それに連なる密林の踏破がウインゲートの英軍によって成し遂げられた。1943年2月中旬、牟田口18師団長のもとに、カーサ地区隊長から有力なる敵部隊がチンドウイン河を渡河し東進中とい

---

<sup>4</sup> 本稿はインパール作戦に関する先人の膨大な研究のゆえに成り立っているものであり、それらを大きく超えるものではない。先行研究すべてを渉猟したわけではないが、とりわけ筆者の問題意識に関しては、戸部良一氏らによる『失敗の本質』（ダイヤモンド社、1984年）の中の「インパール作戦」の章、および磯部卓男氏による『インパール作戦 - その体験と研究 -』（丸ノ内出版、1984年）があらかた論じており、筆者の見解は視点を変えたというだけで両氏の見解や業績を多少補完するに過ぎないものである。

<sup>5</sup> 『戦史叢書 ビルマ攻略作戦』562-563頁。

<sup>6</sup> 同上、565頁。

<sup>7</sup> 1942年10月頃、21号作戦に対する飯田中将の見解を率直に大本営の会議で伝えた諫山15軍参謀長が更迭されるという人事があった。

う報告が入った。爾後 5 月まで牟田口はこのウイングート兵団の掃討作戦に追われる。(なお、この間同年 3 月、15 軍に大きな人事異動があり、牟田口中将は 15 軍司令官に昇格した。)牟田口中将の戦後の回想録によれば、彼にとってウイングートのこの作戦は次のように衝撃的なものであった。

15 軍は本作戦(ウイングート兵団掃討作戦)の結果、地形の認識に重大なる過失をおかしているのを認めた。即ち当該地区の密林は乾季至る所部隊の行動自由のみならずチンドウイン河も乾季筏など現地渡河応用材料を以て容易に渡河し得る事是である。道路山経に沿う地区を堅固にやく守すれば、確実に敵の侵入を阻止し得ると判断していたそれまでの認識を断然一新する必要を痛感した。

この認識の更改は中北部ビルマにおける従来の防衛戦略方策に根本的再検討を促すに至った。当時かくの如き反攻が放射状的に数梯団を以て反復せられた場合には中北部ビルマの防衛は蓋し崩壊に瀕したであろうと思惟したのは私の当時に得た実感であった。ウイングート旅団の外に後続兵団が無いとの確信を得るまでの数日間の苦衷は甚だしいものであった<sup>8</sup>。

## 2 発想から決定まで - 反対者が封じ込められていく経緯 -

牟田口が、インド進攻構想を発想した直接のきっかけは二つある。ひとつは前述のウイングートの第一次挺進隊による攻撃であり、もうひとつは 1943 年 3 月自らが 18 師団長から 15 軍司令官に昇格したことである。発想の当初は、15 軍司令官として、攻勢をもって敵の反攻に先立ち其の攻勢策源を覆滅し、ビルマ防衛任務を全うしようというものであった。それが牟田口自身の頭の中で、その攻勢の目的が変質しインド解放、英国の離脱、大戦の戦局の大転換へと肥大していった。果ては「自分が蘆溝橋事件で大東亜戦争のきっかけを作ったので、自分がインドに進攻し大東亜戦争に決定的な影響を与えることができれば、男子の本懐すぐることなし<sup>9</sup>」といった野望に取りつかれたようになった(牟田口は蘆溝橋事件当時、中国軍と衝突した支那駐屯歩兵第 1 連隊の連隊長であった)。

1943 年 4 月 1 日着任した直近上級司令官であるビルマ方面軍司令官河辺中將に対する状況報告の際、牟田口はアッサム進攻作戦(インド進攻作戦)の希望を申し述べた<sup>10</sup>。これに対して河辺司令官はまことに壮大な意見なりと聞き流しアッサム進攻論に反対し

<sup>8</sup> 牟田口廉也元中将「インパール作戦回想録その一」1956 年(防衛研究所図書館所蔵)56-57 頁。

<sup>9</sup> 『戦史叢書 インパール作戦』(朝雲新聞社、1968 年)90-91 頁。

<sup>10</sup> 同上、547-548 頁。

なかった。以後、牟田口は機会あるごとに方面軍司令官および関係上司にこのインド進攻論を説き、その信念を披瀝しその実現によって戦勝獲得の光明を与えられたいと要請した。

牟田口中将のインド進攻構想（爾後、牟田口構想と略称）の発想から決定までの経緯を概観すると、牟田口の暴走を止めることのできる上級指揮官であるビルマ方面軍司令官河辺中将、南方軍総司令官寺内大将（1943年6月に元帥）、そして参謀総長の杉山大将（同じく1943年6月に元帥）の3人は、基本的に牟田口の思い通りにやらせればよいと考えていた。牟田口の部下は反対しても牟田口が取り合わなかったから、止める可能性があったのは、上級司令部の幕僚である。はっきり反対していたのはビルマ方面軍の高級参謀片倉大佐、南方総軍の参謀副長稲田少将、大本营参謀部の真田作戦課長（1943年10月第一部長つまり作戦部長に昇任）である。とりわけ筆者は稲田少将がこの止め役のキーパーソンだったと考える。

ただインド進攻作戦そのものに反対したのは牟田口に更迭された15軍小畑参謀長のみで、片倉、稲田、真田が反対したのは、そのやり方についてであり、攻勢をもってビルマ防衛を全うするという考え方には異論はなかった。従って、ここで問題にすべきは、なぜ牟田口構想が修正されず、当初のやり方のまま決行されたかである。加えて敵の反攻がない場合（この場合はビルマ防衛が目的であるから我方から攻勢する必要はない）を考えていたかどうかである<sup>11</sup>。

牟田口中将がインド進攻構想をはじめてその幕僚に開陳したのは、新任の小畑参謀長以下軍の幕僚が武号作戦（ビルマ防衛線をチンドウイン河の西岸に推進する作戦）は実施すべきではないという幕僚案を報告した1943年4月下旬頃であった（この武号作戦はインド進攻の準備作戦として牟田口が雨期直前に行いたいと幕僚に研究を指示していたもの）。牟田口は幕僚の消極的態度を難詰し、次のように訓示した。「全般戦局は行き詰まっている。この戦局を打開できるのはビルマ方面のみである。そのため防勢になってはいけない。この際、攻勢に出て、インパール付近を攻略するのはもちろん、できればアッサム州まで進攻するつもりで作戦を指導したい。従って今後は防勢的研究を中止し攻勢的研究に切り換えよ」<sup>12</sup>（この訓示の中で、牟田口は2～3日前15軍司令部に視察に来た参謀本部作戦部長綾部少将が2個師団位のビルマ方面への増強は可能だといったと暗に牟田口構想に賛同しているかのような口振りを示した）。

小畑参謀長は、この牟田口構想をどうしても思いとどませねばならないと考え、18師団長を通じて意見具申しようとした。そのため、司令官を補佐する幕僚として問題あ

---

<sup>11</sup> 攻勢をもって防衛の目的を達成するという考え方は敵が反攻してくるという前提から成立する思想であるから敵が反攻してこない場合、我方から攻勢にでる必要はない。

<sup>12</sup> 『戦史叢書 インパール作戦』97頁。

りとの理由で牟田口に更迭された。小畑はこの時、着任して2ヶ月余りに過ぎなかった。同じ頃、15軍最初の兵団長会同があり、牟田口は各師団長に対しインド進攻構想を披瀝したが、31、33師団長は不同意であった<sup>13</sup>。

1943年6月下旬、ランゲーンのビルマ方面軍司令部で兵棋演習が行われた。目的はビルマ防衛のため局部的に攻勢をとる、その攻勢要領を模索することであった。しかし、15軍は牟田口構想をそのまま持ち込み、これに基づき演習が実施される結果となった。演習実施後、これを統裁した方面軍側の中参謀長から所見が開陳され、牟田口構想は危険が多いとされ、より慎重で確実な方面軍の案が提示された。南方総軍の稲田参謀副長もこの方面軍の案を支持した。この時の牟田口構想に対する稲田の所見は、敵は反攻してくるという前提にとらわれているものの、軍事的合理性を体現しているものである。

「牟田口構想は持てるだけの弾薬・糧秣をもって、チンドウイン河を渡り、道なきアラカン山系を突破し、食が尽きたら、奪取したインパールの糧と輸送力を活用して南方から補給するというまことに虫のいい、獲らぬ狸の皮算用である。そんなことは1942年の春ならできたであろうが、今や着々と反攻の準備を行っている敵を前にしては甚だ無分別だ。ビルマ方面軍の案が妥当なところだ。とにかく牟田口構想には弾力性がない。今回の攻勢はビルマ防衛の一手段であって、本格的なインド進攻作戦ではない。その辺の心づもりが根底から欠如している」<sup>14</sup>（筆者要約）

稲田はこのような見解をもち、インパール作戦はやり方を変えないかぎり、やらせないという方針で、大本営に出張した折り、これを説明し一応の了解を得ていた。ところが稲田がその出張から帰着前後の1943年8月、大本営から南方総軍に対してインパール作戦（「ウ」号作戦）準備に関する指示が発せられたのである<sup>15</sup>。これに基づき、南方軍はビルマ方面軍へ「ウ」号作戦準備を指示、ビルマ方面軍から15軍へ同様の準備指示が出されたのである。しかし、ビルマ方面軍から15軍への準備指示における作戦要領は、牟田口構想を明確に修正した明示的なものではなかった。

ここで注目したいのは、南方軍の準備指示では敵が反攻しない場合を挙げていたことである（実際、この頃敵はビルマ奪回の総反攻について見直しに入っていた）。にもかかわらず方面軍以下ではこれが検討されなかった。敵が反攻しない場合があるということが15軍まで徹底されなかったのである。

1943年8月下旬方面軍からの作戦準備指示を受けての兵団長会同及び兵棋演習が15軍司令部で行われたが、牟田口は作戦構想を変えなかった。しかし、この演習に出席し

<sup>13</sup> 15師団はこの時期まだビルマ方面軍に編入されていない。

<sup>14</sup> 『戦史叢書 インパール作戦』112-113頁、原出所は稲田正純「昭南日記」（防衛研究所図書館所蔵）。

<sup>15</sup> 同上、119頁。なお、1943年7月大本営はビルマ防衛強化のため太平洋正面から2個師団を引き抜きビルマ正面に増強している。

ていた方面軍中参謀長は構想の無修正を黙認した。牟田口構想に反対であった片倉高級参謀はこれを知り「貴方が黙認したことは方面軍が承認したこととなる。(一端承認したものを) どうして修正させるのか」と中参謀長を難詰した<sup>16</sup>。

1943年9月11、12日シンガポールにおいて南方軍主催の各軍参謀長会同が開催された。ここでも15軍参謀長から説明された「ウ」号作戦構想は、従来の牟田口構想と全く変わっていなかった。稲田副長は修正を要求したが、中方面軍参謀長は15軍案をむしろ擁護する始末であった。このように「再三の南方軍・ビルマ方面軍の勧告にもかかわらず作戦案を修正しようとしないう15軍の態度は命令違反だ」と処断を進言する片倉参謀を河辺司令官は15軍の作戦構想に容喙するものだとして採択しなかった<sup>17</sup>。

1943年10月15日、稲田少将に突然の転属命令が下った<sup>18</sup>。後任者は参謀本部作戦部長の綾部少将である。かくして軍事的合理性は封じ込められ、この段階で「ウ」号作戦は牟田口構想のまま、実行されることが実質的に決定したといえよう。

1943年12月下旬、15軍司令部で「ウ」号作戦の兵棋研究が行われた。しかし師団の参謀長が参加者の主体で肝心の担当師団長は呼ばれていなかった。この兵棋研究は牟田口構想を南方軍に認めさせる性格のものであった。演習に陪席した南方総軍参謀副長綾部中将(1943年10月に昇任)は紆余曲折はあったが、結局、牟田口構想を認可しこれを南方総軍司令官(寺内元帥)に答申することに決した。司令官の決裁を得た綾部中将はそのまま東京に向かい、大本営に「ウ」号作戦の認可を要請した。反対の意向を示した真田第一部長は杉山元帥に説得されてやむを得ず了承したとされる。しかし、要請してきたのが真田部長の4期先輩に当たり、前任者でもあった綾部中将であれば、その反対も力のあるものではなかったと考えられる。

1944年1月4日 大本営は南方軍の要請を認可、同7日、大陸指第1776号(「ウ」号作戦認可)が発せられた。

南方軍総司令官はビルマ防衛の為適時当面の敵を撃破してインパール附近東北部印度要域を占領確保することを得<sup>19</sup>

かくして、インパール作戦は認可され牟田口構想のまま決行されることとなった。

---

<sup>16</sup> 片倉衷『インパール作戦秘史』(経済往来社、1975年)103頁。

<sup>17</sup> 同上、104頁。

<sup>18</sup> 転属先は第19軍司令部付である。第19軍は豪北正面の防衛を担当していた。

<sup>19</sup> 服部卓四郎『大東亜戦争全史』(原書房、1965年)594頁。この大本営からのインパール作戦発動認可が「大陸命」ではなく「大陸指」で発せられていることに注意してもらいたい。「大陸命」の場合、天皇の決裁を仰がなければならないが、「大陸指」の場合、事後上奏(報告)で済ませることができる。

### 3 分析 - 1943 年、連合軍の対日戦略におけるビルマ戦線の変化、戦局、政治的要因 -

上述のように日本側では 1943 年の初め牟田口中将が発想したインパール作戦がなんら修正されず、ほぼ 1 年後の 1944 年 1 月認可された。変わったのは、牟田口自身のこの作戦への期待が膨らんだだけである。一方、この 1 年、連合軍側にとってビルマ戦線が全体の戦線に占める位置は 180 度変わった。1942 年のビルマから撤退した直後はビルマ奪回の大反攻を主張していた英国は 1943 年の終わり頃には結局大攻勢を延期し、むしろ守勢をとり、在ビルマ日本軍を最小限の兵力で拘束することとなったのである<sup>20</sup>。

1943 年 10 月、チャーチル首相はマウントバッテン提督 (Lord Louis Mountbatten) に次のように指令した<sup>21</sup>。「貴官の第一の任務は日本軍に執拗に繰り返し繰り返し接触し挑発し続けて日本軍を疲れさせ、特にその航空戦力を消耗させることだ。そうして太平洋正面からビルマ正面に日本軍の戦力を吸引することである。」つまり、ビルマ作戦は支作戦正面となったのである。11 月になるとマウントバッテンの作戦は、在ビルマ日本軍を最小限の兵力で拘束することとなった。従って、日本側がビルマ方面における攻勢作戦に熱を入れ、こちらに戦力を充当すればするほど、連合軍側の思うつぼ (狙い通り) だったわけである。

1944 年 2 月頃までに、英国側は日本のインパール作戦の全容を把握することができた。スリム中将の最終的な作戦計画は、英軍戦力をインパール平原に集中し、ここで日本軍の侵攻を待ち受けてこれを撃滅するというものであった<sup>22</sup>。

また、ビルマ方面での攻勢作戦を採択させた重要な要因として 1943 年の太平洋正面での日本の戦局の悪化がある。太平洋正面では日本軍はことごとく守勢となった。大本営には、どの正面かで攻勢をとって戦局の主導権を奪回せねばというあせりが広がった。1943 年 10 月の人事異動で参謀本部作戦部長に昇格した真田作戦課長の後任としてそれまで陸相秘書官だった服部大佐が返り咲いた。服部作戦課長は 1944 年の攻勢作戦として中国大陸での大陸打通作戦 (1 号作戦) を構想した。この作戦の絡みで服部はビルマ方面の攻勢作戦 (インパール作戦) に異議を唱えなかったのではなかろうか。つまり、この作戦により連合軍側を牽制し、1 号作戦に寄与させることができると。

加えて、チャンドラ・ボース (Subhas Chandra Bose) の極東正面での活動がある<sup>23</sup>。

<sup>20</sup> 磯部卓男 『インパール作戦 - その体験と研究 - 』(丸ノ内出版、1984 年)196 頁より再引。著者は、Louis Mountbatten, "South East Asia 1943-1945: Report to the C. C. S." から引用。

<sup>21</sup> John Ehrman, *Grand Strategy* (London: Her Majesty's Stationery Office, 1956), p. 148.

<sup>22</sup> Viscount Slim, *Defeat Into Victory* (Cassell, 1956), pp. 291-292.

<sup>23</sup> 1941 年 12 月 8 日、当時ベルリンに在ったチャンドラ・ボースは日本の米、英、宣戦の報を聞き、日本行きを日本政府に希望した。しかし、大本営がこれを許容したのが、1942 年の 8 月であり、ボースが来日できたのは、結局 1943 年の 5 月であった。つまり、インドの反英運動が最も高まりを見せた 1942 年の春に、彼はアジアに戻れなかったのである。

1943年7月、ボースはラングーンに河辺将軍を訪ね、会見した。河辺中将はボースの人柄に魅了され、インド進攻作戦が大東亜戦争に大きな意義を発すると確信するに至った<sup>24</sup>。ボースは東條首相とも会見し、10月シンガポールに樹立した自由インド仮政府を正式なインド政府として日本側に認めさせている。このように悪化する戦局と政治的な要素がインパール作戦を決行させる追い風となった。

## II 第2段階 - インパール作戦の実行そして中止 -

### 1 牟田口中将の作戦指導

インパール作戦で損害が増大し、ビルマ防衛態勢を早期に崩壊させた原因となったものに牟田口中将の作戦指導がある。とりわけ、作戦の見通しが立たなくなり、牟田口自身も成功の見通しがなくなったと認識してから2ヶ月も作戦中止の決定が遅れたことである。

英国のある研究者は牟田口中将を「無能」の一言で一蹴している<sup>25</sup>。無能と評された牟田口中将であるが、難関の陸軍大学校を中尉になってすぐに合格しており、下級将校時代はいわゆる優等生であったことは間違いない。ただ、陸大を卒業してからの勤務の特長として1936年の二・二六事件直後に支那の歩兵隊長（連隊長）に転出させられるまで、参謀本部・陸軍省に18年近く勤務していた。その間の部隊勤務は近衛師団の歩兵大隊長2年弱のみであった。この勤務歴からすると典型的な軍人官僚であったといえるかもしれない。

この経歴も関係するのか、牟田口の作戦指導には現場感覚に欠けるところが目立つ。インパール作戦発動直前、敵の空挺攻撃を受けた時（1944年3月5日頃）、東條大将に私信で、空挺対処のために高射砲部隊が配属された増加兵団を要請している<sup>26</sup>。既に敵空挺部隊は降下している。これから高射砲の増援を要求したところで、これがもし増援されたとしても現在降下してきた空挺部隊には到底間に合わない。非現実的措置である。

また牟田口の作戦構想や作戦指導には、実行の可能性という視点が欠けているようだ。補給の軽視、無視は先行研究でたびたび指摘されていることだが、作戦指導の面でも次

<sup>24</sup> 読売新聞社編『昭和史の天皇9』（読売新聞社、1969年）34頁。

<sup>25</sup> ジョン・フェリス「われら自身が選んだ戦場」（『日英交流史3』東大出版会、2001年所収）226頁。

<sup>26</sup> 「軍が攻勢に前進する直前ウインゲート空挺兵団が降下しインパール作戦決行について種々の意見が台頭した際（1944年3月）、私は東條大将に対し私信を以て第31師団、第15師団の外、更に増加兵団を我戦線に加入せしめられ、為し得る限りの高射砲を配属して敵の空中勢力の跳梁を制し軍が最も憂慮して居る補給機関を整備しグライダー部隊と落下傘部隊を軍に配属せられん事を具申する処であった。」（牟田口「インパール作戦回想録その一」）。

のような例があった。4月末、ビルマ方面軍からの増援を得て、攻勢しようというとき、攻勢の重点正面で方面軍と議論になった。牟田口は敵の準備不十分という理由からビシェンプール（Bishenpur）正面に固執した。しかし、牟田口案の場合、方面軍が攻勢正面と指導したパレル正面から戦車や重砲を引き抜いて50キロ以上も悪路をこの正面に移動させねばならない。制空権もない状態で、移動に要する時間や損害、手数に対する考慮が欠けている。加えて、もしパレル正面が敵に突破された場合、軍主力がその背後に敵の脅威を受ける結果となり作戦そのものを破綻させる点から見て、非常に問題点の多い作戦指導であった。

#### （1）作戦間の司令部の位置

彼は作戦開始の1944年3月8日から4月20日までの間の重要な作戦時期に、前線から直距離で300キロも離れたメイミョー（Maymyo）から指揮をした<sup>27</sup>。4月20日インタンギー（Indaingyi）に戦闘指揮所を推進するまで、メイミョーから前線の実態を把握していない不合理な命令が発せられ続けた。例えば、3月23日、タム・パレル（Tamu, Palel）正面で戦っていた33師団の右突進隊を、何故か、軍に直轄し山本支隊とした。加えてその時、15師団の左支隊を山本支隊に配属した。部隊は一端編成し、命令してこれを放したら、部品を交換するように一部入れ換えたり簡単にできるものではない。しかも戦闘中の編成変えは、基本的に机上で考える以上コストが多く、通常変えることで得ようとする利益を越えてしまうことが多い。しかも15師団は1個連隊を軍の予備として引き抜かれ、実質2個連隊すなわち6個大隊であった。それがこの措置で5個大隊となり実質、山本支隊と戦力が変わらなくなった。15師団は主攻師団ではなかったのか。

3月26日軍の直轄となった山本支隊はモーレー（Moreh）を攻撃しあぐねていたが、敵がそこを計画に基づき撤収したため陣地を占領できた。支隊は軍にこれをモーレーの敵陣突破と報告したのであろう。戦後、15軍の牟田口司令官以下主として司令部幕僚によって書かれたインパール方面作戦記録には3月26日山本支隊モーレー突破と記録されている<sup>28</sup>。軍の直轄としておきながら、現地の実態を正確に把握していない証左と考える。

#### （2）33師団長柳田中将の退路開放命令

第33師団は敵第17インド師団の撤退の遅れについて、3月14日その退路を遮断した。しかし、実際シングル（Singgel）付近で退路遮断に任じた歩兵第215連隊の大

<sup>27</sup> その理由は空挺攻撃対処のためとされている。

<sup>28</sup> 厚生省復員局調製「ビルマ作戦記録 インパール方面第15軍の作戦」1949年（防衛研究所図書館所蔵）161頁。

隊と大隊は包囲した第 17 インド師団とインパールからの救援部隊とに挟撃され、戦力をすりつぶされた。3 月 25 日歩兵第 215 連隊長笹原大佐は柳田師団長に「全員玉砕覚悟で任務に邁進す」と打電しながら、両大隊には独断退路開放の命令を下していた。笹原大佐から柳田師団長への無線に齟齬があり、「全員玉砕」と報告された。それもあり、柳田師団長は笹原連隊に退路を開放させるが、退路を遮断していた部隊はすでに殆ど戦力を消耗しており、開放命令がなくとも、英印軍に突破されたであろう。

退路を遮断する兵力が不足していた。これは牟田口構想の部隊運用のゆえである。つまり、ビルマ方面軍の案なら、トンザン (Tongzang)・シングルからインパールの方向に 33 師団全力を充当して、なお 31 師団主力を予備隊として保持していたので、迂回、包囲部隊のやり繰りはつく。しかし牟田口は、33 師団を軍の助攻として、トンザン・シングル～インパール方向とタム (Tamu)・パレル (Palel)～インパール方向に師団戦力を二分させ、必然的に当該正面の歩兵部隊を少なくさせている。それが退路遮断部隊へ増援を送ることが出来ない主要な理由であり、敵の溢出、そして突破につながったのである。従って、柳田師団長が状況を悲観して退路開放命令を発したから、第 17 インド師団を取り逃がしたという非難はあたらない<sup>29</sup>。

### (3) ディマプール (Dimapur) 突進問題

1944 年 4 月 6 日頃 31 師団左突進隊コヒマ (Kohima) 占領の報告が 15 軍司令部に入った。牟田口中将は 31 師団長に対し「師団主力をもって引き続きディマプールに追撃」を命じた。ところが、これを知ったビルマ方面軍は至急電により「第 15 軍司令官はディマプールへの追撃を中止すべし」と命令した。

牟田口中将は戦後「31 師団がコヒマで停止せずにディマプールに進撃していたら、インパールを支援しようという英軍のあらゆる試みが粉碎され、結局、この方面の英軍の防衛体制が破綻した」と主張した。この主張をまとめた文書<sup>30</sup>によると、これは 1962 年英 14 軍参謀バーカー中佐からの手紙がきっかけになったものだ。牟田口中将はこの手紙を「神のお告げ」と歓喜し、「わたしは間違っていなかった。なにも恥じることはなかったのだ。わたしが決心していた通りやっていたら勝てたのだ」と書いている。しかも、それだけではおさまらず、31 師団に対するディマプール追撃命令を認めなかった河辺中将を逆恨みまでした。またこの資料の中では戦後、宮崎兵団長も牟田口軍司令官の

<sup>29</sup> 退路遮断部隊であった歩兵第 215 連隊 1, 3 大隊の生き残り兵士の証言では 3 ヶ所の陣地のうち、どうにか確保していたのは 1 ヶ所で他の 2 ヶ所はあふれんばかりの敵が溢出しており、突破されるのは時間の問題だったという(歩兵第 215 連隊戦記編纂委員会『歩兵第 215 連隊戦記』1972 年、538-558 頁)。

<sup>30</sup> 元 15 軍司令官陸軍中将牟田口廉也「1944 年「ウ」号作戦に関する国会図書館における説明資料」(国会図書館所蔵)。

ディマプール突進構想に同意していたように書かれている。果たして 31 師団のディマプールへの追撃は可能であったろうか。軍事的合理性の視点から検討してみよう。

筆者の結論は極めて困難であるというものである。それは日英の公刊戦史を基に 1944 年 4 月 4 日から 4 月中旬頃までの両軍のコヒマ西南高地周辺への兵力進出状況を検討した結果である。英軍側は当初からこの一帯の緊要地形であるコヒマ西南側高地に陣地を確保していた。加えて逐次コヒマ周辺に増援してきた日英両軍の兵力の格差である。しかも、制空権は終始英軍側にあった。

確かに、宮崎支隊長が 4 月 4 日コヒマ部落を占領した歩兵第 58 連隊 3 大隊を北方のチェズウエマ (Cheswema) に向かわせず、コヒマ西南側高地を背後から攻撃させていたなら、この高地は奪取できたかもしれない。しかし、奪取しえても、その後の戦闘様相は現実に繰り広げられたコヒマ西南側高地の争奪戦と同じであったろう。

『コヒマ (KOHIMA)』の著者 A・スウィンソン (Arthur Swinson) は、この問題について河辺と牟田口の命令を比較した上で「牟田口の方が実際正しかった」と断言している<sup>31</sup>。しかし、これは日本軍を過大評価しすぎている。ディマプールに進出できるのは歩兵第 138 連隊第 3 大隊が先頭になるであろう。その 3 大隊はコヒマ～ディマプール道遮断のため 4 月 6 日コヒマ西方 15 キロの高地に進出したが、そこで英軍部隊と接触する。大隊はこれを夜襲したが、失敗、大隊長は戦死して、以後両部隊は対峙状態のままとなった<sup>32</sup>。結局ディマプールへの突進が成立するためには 31 師団に補給能力があり火力が追隨しているという英側と同様な条件が必要である。師団の山砲兵連隊のコヒマ進出は 4 月 20 日頃と予測されており、携行して来た補給品も底をついてきた。軍からの補給は期待できず、コヒマで手に入れた敵の物資も砲爆撃で失われた。英軍側はディマプールからの増援が日を追って殺到していた。なによりも 1944 年の英印軍は牟田口がシンガポールで戦った時の包囲すれば逃げる英印軍ではなかった。

牟田口のアイデアがたとえ戦理的に妥当なものであっても、そこには補給と火力の裏付けなしには、アイデアは実現しないのである。地図の上に矢印は一瞬にして引けるが、実際そこを進むのは重い武器・弾薬・糧食など携行した生身の人間の部隊である。

<sup>31</sup> A・スウィンソン『コヒマ』長尾睦也訳 (早川書房、1967 年) 81 頁。Swinson, Arthur, *Kohima* (London: Cassell, 1966), p. 65.

<sup>32</sup> 『戦史叢書 インパール作戦』498-502 頁。S. Woodbarn Kirby, *The War against Japan* (London: Her Majesty's Stationery Office, 1961) p. 300. この日英の両公刊戦史を読み比べると、例え 4 月 5 日ないし 6 日、日本軍がコヒマ～ディマプール道を突進し得ても、隘路の出口にあたるニチュガード (Nichugard) には英第 161 旅団と第 1 ビルマ連隊が 4 月 4 日に集中しており、これと接触せずディマプールに進出することは難しい。

## 2 作戦中止まで - 3 師団長更迭と中止決定の遅れ -

### (1) 3 師団長更迭

インパール作戦では、3 人の師団長が全員更迭されるという異常事態を現出した。それぞれ更迭理由は異なる。牟田口が三人の師団長を更迭した時機は既に作戦の趨勢が決した後であった。まず第 33 師団長柳田中將がその指揮に問題ありとして 5 月初めに更迭された。5 月末、31 師団長は独断退却したとして、一方 15 師団長は病気を理由に同じ頃更迭された。しかし、31 師団長はともかく、15 師団長が病気であること及びその病状が悪化していたことは、師団の岡田参謀長が軍医部長との間で参謀長限りのこととして部外に秘しており<sup>33</sup>、牟田口中將がそれを知ったのは更迭した後ないしは戦後のことと推測され、実際の理由はこれも山内中將の指揮振りが牟田口の意にそぐわなかったことにあると思われる。

更迭された 3 師団長に共通しているのはともに牟田口構想に同意していなかったことである。牟田口はこれを承知していたが、彼らの意見にも耳を傾け、自らの考えもねばり強く伝え、意思の疎通を図ろうとする努力をしなかった。自らの信念を一方向的に押しつけるのみであり、師団長達が自分の構想に反対だとわかると、かれらを疎外した。牟田口中將が初めて隷下師団長にその構想を開陳した 1943 年以降の重要な作戦関連の会同や兵棋演習に 33,31 両師団長は一度も参加していないことに注目したい。(彼らが参加しようとしなかったか、牟田口が参加させなかったかは不明であるが、本来万難を排して参加せよと牟田口が命ずるべき事柄である。)

このように、第 15 軍は軍司令官と各師団長の心が離れたまま作戦に入った。杜撰な計画と指揮官同士の団結の不在、3 師団長更迭という事態も当然であったかもしれない。しかし、あまりにも多くの命を失わせた牟田口中將の統率であった。

### (2) 中止決定の遅れ

損害を大きくした、あるいは無益な損害を出した最大のものは、作戦中止決定の遅れである。筆者は、実際に作戦が中止された 7 月 2 日以前に、中止を決定できる機会が 2 度あったと考える。1 回目は 4 月末であり、2 度目は、6 月 6 日である。

4 月 20 日前線に進出した牟田口は初めて第一線の実相を見せつけられる。その現場で彼はメイヨー想像していたものとは全く異なる現実と直面した。たちまち牟田口は気弱になっている。それが推測できるのは、4 月末、ビルマ方面軍の後参謀が前線の状況把握のために第 15 軍の前線司令部のあるインタンギーに来て、牟田口と会った時の記

---

<sup>33</sup> 高木俊朗『憤死』(文芸春秋社、1969 年) 13-16 頁。

録である。「今一息の処で力が不足している。実際残念と思う」という趣旨の発言、あるいは、中参謀長への名刺の裏に書いた伝言「遙かに東京を思うて慚愧に耐えず」<sup>34</sup>である。牟田口はこの時、作戦の失敗を認識していたと思われる。

2度目の機会は6月6日の河辺と牟田口の会談である。その10日余り前の5月25日、佐藤31師団長から「6月1日までにコヒマを撤退し補給を受け得る地点に向かい移動せんとす」という独断撤退の電報を受けていた。この電報に驚愕した牟田口は、「理解に苦しむ」などと返電したが、佐藤中将に決心を変更する気配はなかった。6月2日、結局、牟田口はこの撤退を事実上黙認し、これを取り繕う転進命令を発電する。「31師団はウクルルで補給を受けた後、6月10日までインパールに対し、15師団と並列して攻撃する準備をとれ」。(しかし、これは実行不可能な命令だ。コヒマからウクルルまで実距離で200キロあり、10日までにそこで補給を受け、15師団の左翼に出て、インパール攻撃の準備をすることはできない。しかも、この時同時に15師団に対して作戦地域を大きく西側の山地に移動させている。これも15師団の現状を無視した実行困難な命令であった。)そのような時に、河辺ビルマ方面軍司令官と牟田口15軍司令官の会談が行われた。先行研究で何度も紹介されているこの会談は全く面妖なものである。

牟田口；私は「もはやインパール作戦は断念すべき時機」であると咽喉まで出かけたが、どうしても言葉に出すことができなかつた。私はただ私の顔色によって察してもらいたかつたのである

河辺；「牟田口軍司令官の面上にはなお言わんと欲して言い得ざる何物かの有する印象ありしも予亦露骨に之を窮めんとはせずして別る」(河辺日記6月6日の項)

かくして両者は決断を先送りし、多くの将兵の命が救われる機会を逸した<sup>35</sup>

### (3) 中止決定が遅れたために失われた命

前線部隊はこの会談があつた6月初め以降も攻勢を続けていた。6月7日払暁ビシエンプール(Bishenpur)正面では33師団歩兵第215連隊第1大隊が観測所陣地の敵に対して2度目の攻撃を実施した。山砲以下の重火器が一斉射撃を開始した。前日の失敗に対策を施し充分準備した効果があり、各隊は白兵突撃をもって敵陣内に突入し抵抗する敵を撃破しつつ目標に通ずる並木道付近まで突進した。

この戦闘において第4中隊長永井達雄中尉、第2中隊長代理阿部利雄少尉、第3中隊長代理藤沢大二郎少尉は白刃をふって陣頭に立ち突撃中、敵陣からの自動火器の集中射

<sup>34</sup> 後勝『ビルマ戦記』(日本出版協同株式会社、1953年)30頁。

<sup>35</sup> 『戦史叢書 インパール作戦』570頁。

撃を受け、壮烈な戦死を遂げた。戦死した中隊長の一人阿部利雄少尉は3月28日挺身隊の隊長として部下28名を率いてシルチャー（Silchar）道の敵の重要な橋梁爆破の命を受け、1ヶ月後の4月26日1名の犠牲もなく任務を全うして帰還したばかりであった<sup>36</sup>。

公刊戦史などを基に調査した限りでは、15師団と33師団で最終的に判明した死亡者は13,376名であるが、そのうち7,500名余りはこの6月以降に亡くなっている<sup>37</sup>。

結局、インパール作戦を中止させたのは、コヒマ-インパール道が英印軍に打通されるという覆い隠せない現実である。これによって、インパールを包囲するというこの作戦の根本要件が失われた。さすがの牟田口も河辺も事実上の中止を上級司令部に意見具申せざるを得なかった。南方軍も大本営もこの現実そして作戦の失敗を認めることとなり、7月3日南方軍から「インパール方面は持久に移れ」という中止命令が下達された。

### 3 分析 - 大本営が上奏した中止の理由 -

1944年7月1日、大本営はインパール作戦の中止の件に関して次のように上奏した<sup>38</sup>。「このまま、インパール作戦を継続しますと、ビルマにおける堅実な戦略態勢を崩壊せしめ、大東亜戦争全般の作戦に重大なる影響を及ぼすおそれがあります。インパール作戦を中止してもビルマ全般の作戦に影響するところ極めて少ないと思われまます。しかし、印支連絡路の遮断作戦は、これを放棄する時、支那を基地とする我が本土空襲並びに本土と南方地域との交通遮断作戦が急速に進展し我が全般作戦の指導に影響するところ極めて大であります。印支連絡路の遮断はビルマ作戦の究極の要件であります。」

つまり牟田口構想によるインパール作戦と印支連絡路の遮断作戦は両立しなくなっていた。緒戦に日本がビルマに進攻した目的を振り返れば一つは自給圏の西壁の構築、もう一つが援蒋ルート（印支連絡路）の遮断であった。インパール作戦の本来の目的は敵の総反攻に先んじてその策源地を占領・覆滅する攻勢行動により全ビルマ防衛の目的を全うする作戦であったはずである。これに牟田口はあわよくば、印度解放、英国脱落という誇大な目標を加えた。この過望な目標、目的の逸脱によって大損害が生じた。そしてビルマ作戦の本来の目的である自給圏の西壁、印支連絡路の遮断をも危うくするも

---

<sup>36</sup> 歩兵第215連隊戦記編纂委員会『歩兵第215連隊戦記』1972年、587-590頁。この戦記によれば、阿部挺身隊の爆破の件はスリムの『敗北から勝利へ』でも取り上げられているとのこと。この橋は深さ80フィートの谷に架けた300フィートの吊り橋で、その破壊は道路の杜絶となった。

<sup>37</sup> この数字算出の根拠は次のようなものである。『戦史叢書 インパール作戦』542頁には、5月31日現在の33師団の損害状況が、また同587頁には15師団の6月4日現在の損害状況が及び陸戦史研究普及会『陸戦史集 17 インパール作戦（下巻）』（原書房、1970年）202-206頁には5月下旬現在の15師団の損害と第15及び33師団の最終損耗が掲載されているのでこれらを根拠に算出した。

<sup>38</sup> 『戦史叢書 インパール作戦』611頁。

のとなった。1944年8月ミートキーナ陥落によってレド公路貫通は目前であり、印支連絡路の遮断というビルマ作戦究極の要件も失われるのは時間の問題となった<sup>39</sup>。

結局、日本陸軍は大東亜戦争の終始中国に拘束されていた。支那事変から大東亜戦争への展開にも議論はあるが、対中戦が大きな要因であり、ビルマまで出てきたのも援蒋ルートが目的であった。インパール作戦の中止にあたって、印支連絡路の遮断というビルマ作戦の究極の要件が中止の理由に持ち出された。連合軍が蒋介石を支援するのは中国に対日戦を続行させて日本軍の兵力を牽制させることが狙いであったことを想起すれば、日本軍はこの連合軍側の狙い通りに行動したことになる。

### むすび－牟田口中将の戦争指導の特質－

牟田口中将には戦略を実現させる両輪が欠けていたように思われる。つまり情報と兵站である。牟田口中将がインパール作戦を発想する契機となったことのひとつにウインゲートのチンデットがある。興味深いのは、牟田口はこの挺進行動を成立させる重要な要因である空中補給に全く、関心を示していないことである。ただアラカンの大山系やチンドウイン河を踏破してきたことについてのみ驚いている。したがって、彼のインパール作戦計画では、まともな道路もないジャングルの大山系に2個師団、補給の手当もせず軍の主攻と称して送り込んだのである。つまり弱い英印軍ができたのだから精強皇軍にできないはずがないというのであろう。

また牟田口の英印軍観はシンガポール攻略戦の経験から変化していない。しかも敵の動きや変化そして戦争の変化や技術の進歩にも無関心なようである。インパール作戦直前の第二次アキャブの戦いで英印軍の円筒陣地、立体戦の威力を学習できたはずなのに、平面的に敵を包囲すれば、勝てる、敵は側背に脅威を感じて逃げると思い込んでいた節がある。

総じて牟田口中将には敵の企図・能力が常に変化するという前提でこれを冷静に観察し、私の能力とりわけ兵站を踏まえ、到達できる目標を的確に算段するというプロの軍人としての思考過程を過剰な使命感で抑え込む傾向があった。加えて、当時の日本軍ではたとえ実行の可能性に問題があっても、積極的、攻勢的な作戦構想・作戦指導が慎重で防勢的なものよりも好まれる傾向があったことも事実である。それもまた牟田口中将は師団長から軍司令官に昇格したのであろう。しかし、そのような性質をもった軍人を将軍として、しかも1943年という時期にビルマ北部と中部防衛担当の15軍司令官にしてしまったことにインパール作戦の悲劇があった。

<sup>39</sup> 『戦史叢書 イラワジ会戦』63-64頁。

当時の日本の軍人達が慣れ親しんだ山本常朝の『葉隠』に次のような一節がある。

「一念志し候へば叶はぬと言う事なきもの也」<sup>40</sup>。山本常朝はこの書の中で、意志力こそが本質であり物質が優越しているのではないと繰り返し論じている。いわば意志力信仰のような考え方が牟田口中将はじめ当時の軍人を支配していたとって過言ではない。しかし、このようにいわゆる「根拠のない楽観主義」は第 15 軍司令官牟田口中将にとっては危険なものであった。

牟田口中将は大東亜戦争の引き金を引いたのは自分だと自己規定した。それはだからこの戦争の幕を降ろすのも自分だと言いたかったのであろう。この誇大な野望のうちに開始されたインパール作戦は陸軍史上記録に残る敗北となり、その歴史にある意味での幕を降ろしたのかもしれない。そういう意味では牟田口中将は大東亜戦争の始めと終わりに重要な役割を果たした。しかし、それは、あくまでも否定的な意味での役割であった。

---

<sup>40</sup> 山本常朝『江戸史料叢書 葉隠(上)』(人物往来社、1968年)100頁。『葉隠』の著者山本常朝は江戸時代初期(17世紀)、現在の佐賀県鍋島藩の武士で、忠勤に励んだ君主が没した後、出家して隠遁この書を著した。牟田口中将はこの佐賀県出身である。